

特118

55

震笑悲劇

火の地獄

花村露子著

国立国会図書館

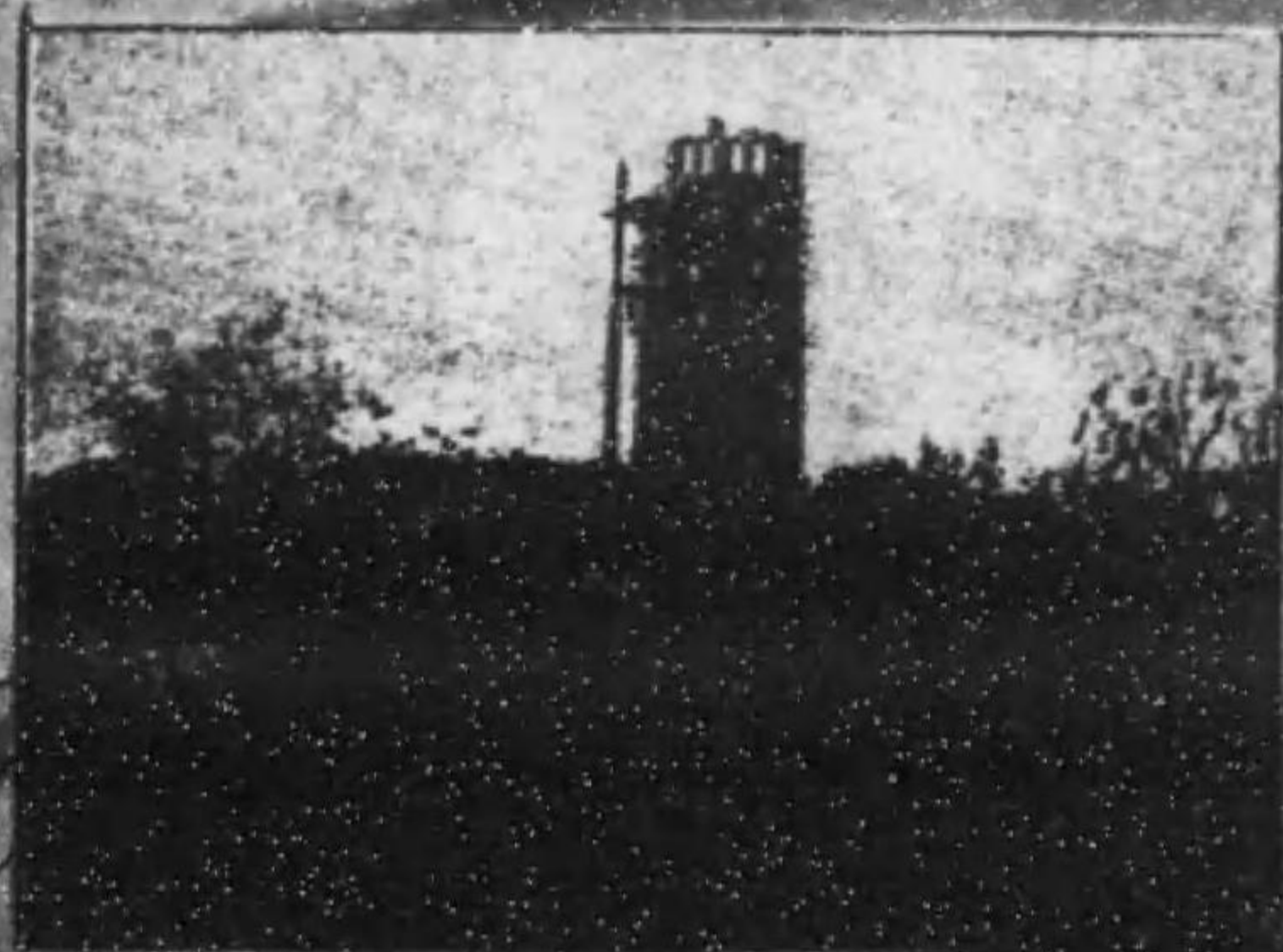


始



# 火の城

震災悲劇



花村露子 著

文芸春秋社  
昭和18年8月16日  
発行

特 118  
55



震災  
悲劇

# 火の地獄

花村露子著

上

本所の被服廠から程遠からぬ處に、高宏なお邸がありました。その近所に庄作の家がありました。庄作はまだ十三の少年であります。こんな裏店住ひはして居りますけれど、正直で親切でそして勇敢なおとなしい子供でありました。家は貧しく、お父様は小さい頃に亡くなり、今は年老いた祖母と母と唯三人きりで淋しく暮して居りました。

近所にある高宏なお邸は、もと庄作の父の持家で、庄作親子は、そのお邸に住んでゐたのですが、今のお邸の主人と云ふのが、腹黒いよくない人で、庄作の父がある大きな貿易の商館を經營してゐる頃、支配人に使つてゐた者でありました。

處が庄作の父が商用の爲に外國へ行つてゐた留守で、よくないこの支配人がお金を胡魔化してしまひました。

不幸にして庄作の父は外國で、フトした病氣がもとで死にました。そして小さな骨箱に入つて、日本へ歸つて來ました。

庄作はまだ物事の解らぬ幼ない時でしたので、お母様と祖母様とが泣く／＼葬式を濟ませました。

人間と云ふものはいゝ時ばかり、チャホヤ云つて近づいて來ますが、さて一度何かあると、それきり振り返つても見ないのが、當世の人情で

あります。

それ程薄情な世の中とは知らず、庄作のお母様は悪い支配人が、今までうけた恩返しに何かと、相談相手になつてくれるものとばかり思つて居りました。

けれども支配人は劔もホロ、で、お店は横取りにする……この大きなお邸まで取つてしまひました。お母様は仕方なく子供だつた庄作と祖母様の手を引いてこのみすばらしい、小さな裏長屋に住む事



になつたのでありました。

別に親戚も身よりもなく、何一つ金目のものもなし、遊んでゐてはその日の暮しにも困るので、お母様は手内職をしてホソくくと、唯庄作の大きくなるのを樂しみに、一生懸命に夜寝る目もねずに働いて來たのでありました。

世の中に神様や佛様はないのかしら……と、祖母様が嘆いた程、庄作の家は不運つゞきでありました。

庄作が十三になる前の年に、お母様はあまり一生懸命に働いて、身體を無理につかつたのがもとで、重い病にかゝりました。

庄作も祖母様も、ソレ醫者よ、ソレ薬よと手當をしたいのでしたが、何分にもその日もやつとの事で暮してゐる有様なので、お母様に薬を買つて上げる事すら出來ませんでした。

親孝行な庄作は自分の身體は何うなつてもいゝから、何うかしてお母様の身體を今一度もとへ戻したいと云ふ一心から、朝は早くから起きて誰にも氣づかれぬ様に家を出て、淺草の觀世音へ一心不亂にお祈りをして來るのでした。

そしてお臺所の事から祖母様の面倒を見たり、お母様の看護をするのでした。

悪い支配人の名は高津清三と云ひます。この人にやつぱり十三になる女の子で、光子と云ふ氣立のやさしい子がありました。

親の清三とは全然心持ちが違つてゐて、可哀相な人達には物を惠んでやつたり、親切にいたわつてやつたりしてゐました。

『高津の旦那は鬼の様な恐しい人だが、あのお嬢様は女神の様な方だと、近所の人達が噂をしてゐました。』

この光子と庄作は、同じ學校で同じ學年で、そして大層仲のよいお友達でありました。

親と親との間に、さうした悲しいゴタ／＼のあつた事などは、二人は夢にも存じません。

庄作は家が貧しいし、それにお母様や祖母様の面倒を見なければなりませんから、高津の邸へ遊びに行つた事はありませんが、光子は時折庄作の處へ遊びに来て、お互に教へたり教へられたりして、學校の復習や豫習をする事もありました。

庄作のお母様もこの無邪氣な光子まで、怨む心は持ちませんでした。神様の様なやさしい、そしておとなしい光子が遊びに来るのを、いつも笑顔で迎えてゐました。

光子も亦すつかりなつてゐて、

「小母様、小母様……」

と、本當のお母様のやうにしてゐました。

けれどもいつか話しの折に、お母様と庄作が、邸の何處に池があつてお部屋のどこに何があるかと云ふ事まで、光子に話しますと、光子は眼を丸くして、

「本當ですれ、何うしてそんなによく御存じなの？ 私留守の時遊び

に被來つた事があつて？」

と、訊きました。

けれどもお母様も庄作も、唯笑ふばかりで、以前は私達の家でしたと云ふ事は少しも申しませんでした。ですから光子は尙更不審でなりませんでした。家へ歸つて、お父様の高津清三やお母様に、その事を話しました。お父様とお母様はいやな顔をして、お互に顔を見合せて被在いまし



事は出来ませんでした。  
 『庄ちゃん、私ねあなたの處へ遊びに行く事を、お父様やお母様がゆるして下さらないのよ、ですからあなたと小母様と、そして祖母様と、私のお家へ遊びに来て頂戴な』  
 ある日光子は學校で庄作に怗う云ひました。  
 『有難う……』  
 と、庄作は云つたきり、遊びに行くとも、行かないとも云ひません

たばかり……。

『光子、あすこの家へは絶対に遊びに行つてはなりません』  
 と、お父様はこわい顔して仰有いました。

『そして最う學校でも、庄作とは口を聞いてもいけませんよ』  
 と、お母様も仰有いました。

光子は不思議でなりませんので、

『何故、遊びに行つてはいけないんです、口を聞いてちや悪いの？』

と、訊きましたけれども、唯いけないの一點ばかりでその譯を聞かせては下さいませんでした。

さう云ふ事を云はれたのが、光子には悲しくつてなりませんでした。

けれども光子は學校では、いつも仲よく遊びました。併し家へ歸つてからはお父様やお母様が許してくれませんので、庄作の處へ遊びに行く

でしたが、庄作の顔色は曇つてゐました。

庄作はお母様から、最近になつて高津の邸はもと自分の家であつた事や、高津がお父様の死んだ跡で横取りした事などを聞きいて知つてゐるので、光子の遊びに来る事を、彼女の両親が止めだてする腹のなかも解りました。

けれども決して光子を憎むなどと云ふ心はなく、唯お友達が無くなつた位の淋しさでゐました。

するとお母様の病氣……と唯今日此頃はお母様の事ばかり心配になつて光子の事など考へる暇もありませんでした。

中

ある日の夕暮れ、しかも雨のシト／＼と降るなかを、庄作は元氣のよい聲で、

「納豆……納豆……。」

と、街から街、露路の隅々まで呼び歩いてゐました。

そしてすつかり賣りつくして、今しもいそ／＼として我家へ歸る途すがら、バツタリ逢つたのは光子でありました。

「あら、庄ちゃんぢやないの？」

美しい着物をきて、きれいな傘をさした光子は、立派にお化粧をしてゐました。

庄作はやぶれ傘をかついで、納豆を入れた籠を下げて、チビの下駄穿きで、足は泥で汚れてゐました。

「まア、納豆賣をして被在るんだわねえ」

光子は驚いた様な大きな聲で、クリ／＼した可愛い眼を睜りました。「納豆賣をしちや悪いのかね、君の家と違つて僕の處は貧乏なんだから



ね………だけど貧乏一たつて人様の物を盗んでまで、お金持ちにならうとは思はないからね』

庄作は凜とした聲で恚う云ふと、急いで歸らうとしました。

『あら、御免なさいな、庄ちゃん、私、そんな悪い氣で云つたんぢやなくつてよ。』

『僕、急ぐのさ、家には病氣のお母様や、年老の祖母様が待つてるんだからね………失敬。』

『まア、待つてよ、庄ちゃん……庄ちゃん、てば……。』

後追ひかけたけれど、庄作は振り返つても見ずに、スタ／＼と歸つて行きました。

光子は暫くの間、庄作の姿が學校に見えない、もしや病氣ぢやないのかしら、それともまたお母様や祖母様か、またはもう他所へ引越してし

まつたのぢやないか、と毎日小さい胸を痛めて心配して暮してゐたのでありました。

両親からは庄作の家へ行く事は止められてゐますから、様子を見にも行けないのでした。

學校でも先生達が、あの勤勉な庄作が、無斷で幾日も休んでゐるのは何うしたんだらうと、大變心配して居られたのでありました。

それが思ひがけなく意外の姿で逢つたので、光子は驚きと嬉しさで云つた言葉が、庄作には馬鹿にされたとても思つてか、振り返りもせずに行つてしまつたのです。

光子は庄作が云つた『お母様が病氣……』と云ふのに氣がついて、早速家へ歸ると、あれこれと見舞の品物や銀行からお金を出したりなどいたしました。



そして翌る日の朝、いつもの通り学校へ行く風で家を出て、その足で庄作の家を訪れました。

庄作のお母様は喜んで光子を迎えました。光子は庄作に自分の心持ちや心配してゐた事を話しましたので、庄作も大變喜びました。

「光子さん、本當によく来て下さいましたね、最うあなたには逢はずに死んで行くのかと思ひました。何うか今一度逢ひたいと思つてね、どんなに毎日待つてゐたでせう」

と、庄作のお母様は涙を流して、光子の手を握られました。

光子は今までお父様やお母様の許してくれない事や、小母様の病氣と知つて大變悲しく思つた事や、何うかして今一度もとの身體になほしたと思つて、今まで預金してゐた金を全部持つて來たと、お醫者様に診て貰ふ事などを話しました。

庄作もお母様も祖母様も、この光子の神様の様に美しい心を、どんなに嬉しく思つたでせう。

高津清三は悪人の様に憎んではゐましたが、この光子だけは憎む心などは少しもありませんでした。そして光子の心情に對しても、今までのとは夢とあきらめて、お互に仲よくいつまでも助け合つて下さいと、お母様は庄作にも光子にもシミ／＼と申しました。

「本當にさうしませうね、庄ちゃん」

と、光子はすりよりました。

「さうだ、いつまでも兄妹の様に助け合つて、仲よくしませう」と、云つた庄作も光子の傍へよつて、二人は確く／＼手を握り合ひました。お母様はその様子を見て安心した様にニツコリなさいました。

下

それから僅か経つての事ですが、妙に暑苦しい日が來ました。

大正十二年九月一日の正午も四五分前の事です。

庄作は第二学期の授業の始まる日ですから、學校へ行きたいのでしたが、お父様の命日であり、祖母様がお墓参りに行くお供をせねばならぬので、學校を休んで祖母の手を引いて、山の手のあるお寺へ参りました。そして事なく墓参も済んで、お寺の庫裡で祖母様と一緒にお茶を御馳走になつてゐると、急にミシ／＼と家が揺れ出して來ました。

「あッ、地震だッ」

と、叫ぶ間もなく庄作は祖母様に縋りつきました。

電燈はブラ／＼と動く、自在鍵の釜は落ちる、疊は持ち上る様に揺らいで、ミリ／＼と激しい音と共にホコリはバツと立つ。バラ／＼と壁はくづれて砂が立ち上ります。

「あゝ大變だ、助けて……………」

と、悲鳴が上ります。

「早く逃げろ…………戸外へ…………お墓の傍へ…………」

と、叫ぶ聲を聞くと同時に坊主達は、丸い頭をヒョコつかせ乍ら、立ち上らうとしても、船が動揺する様にユラ／＼と激しく家が動くので、立つとも出來ず、漸く大黒柱に獅噛みついてガタ／＼ふるえてゐるばかりでありました。

「南無阿彌陀佛、々々々々々々。」  
と、念佛ばかり唱へてゐましたが、  
棚のものは花の散る様に落ちて來  
る置物はころげ出す……大變な  
騒ぎでありました。

庄作は漸くの事で祖母様を助け  
て、墓場まで逃げて來ましたが、  
石碑は倒れてゐますし、花筒はこ  
ろげてゐて、目もあてられぬ慘酷  
な有様でした。

祖母様は大きな聲を出して、  
「庄ちゃん、早く家へ歸りませう、



病氣の母ちゃんが心配だから……」

「いえ、祖母様だけはこゝにゐて下さい、あなたの足ではとてもお家ま  
で行かれませんが、僕が走つて行つてお母様を連れて來ます」

庄作は墓場へ祖母様を残して走り出しました。

あの身體の動けないお母様は、唯一人で嘸困つて被在るだらう……  
お怪我はないか……御無事でゐて下さればいゝが……と、庄作は夢中にな  
つて、本所の家へと走つて來ました。

道々、家の倒れたのを見る度に、もしやくと心配する庄作は、お母  
様のことが心配になつて、泣きたい位でありました。

電車は所々に空車の儘捨て、あります。電車道には町家の人々が、板  
だ蓆だ、毛布だ、樽だと、いろ／＼な物を持ち出して、一杯避難してゐ  
ます。そして親子兄弟皆な大事な品物を持つて、抱き合つて蒼い顔して

「深川だ」  
 「いや、浅草だ」  
 「あつ、本所の方だ」  
 皆なが云ふ通り、四方八方から  
 煙が上つてゐます。  
 「本所?.....」  
 その聲が一生懸命に走つてゐる  
 庄作の耳に入つた時、  
 「お母様は.....」  
 と、庄作の身には母を思ふ一念で  
 一杯でありました。  
 漸く兩國橋の處まで来た時には



ふるえてゐました。  
 なかには箆笥や馬尻、手桶御飯道具まで持ち出してゐるものもありま  
 した。本當にドイツの兵隊が飛行機で、敵軍に攻められたよりも、もつ  
 とく大變な騒ぎで、誰の顔にも恐怖と不安の色に閉されてゐました。  
 「火事だ。」  
 と、道を走つて行く人の聲が聞えると同時に、庄作は思はず立ち止まつ  
 て前方を見ました。  
 黒い煙が空に沖してゐます。  
 「あつ、あちらも火事だ」  
 「そら、むかうもさうだ」  
 人々は一層不安と驚きと悲しみに戰のいて、オロ／＼してゐます。  
 「何處だ.....火事は何處だ」

ワア／＼と人の叫ぶ聲、人の波……そのなかに荷車に一杯家財道具を山に積んで、我先と逃げて来る人々で橋を渡ることが出来ませんでした  
 「本所は火の海です」  
 と、眼の色を變へて云つた老人の背中の荷物が、ムク／＼と煙を吹いて  
 りました。

「あツ、火がついてゐるツ」

と、云はれてその人は屹驚仰天して、ワツと悲鳴を上げると同時に、  
 「助けてくれ……助けて……」

と、身悶えしてゐましたので、庄作は傍へよつて荷物をとつて捨て、や  
 りました。

見ればドン／＼焼けて行く本所の町々の有様を見ると、本當に庄作は  
 夢中で、何うして橋を渡つたか自分でも判らぬ位でした。



「危ない、危ない、早く逃げろ」  
 と、お巡査さんが庄作を捕へて引きもどさうとしましたが、庄作は  
 必死になつて、

「いえ、僕は死んでも構ひません  
 唯一人の病氣のお母様を助けねば  
 なりませんから、離して下さ  
 い……」

と、無理に引きとめる巡査の手を  
 振り放して、一散に走つて行きま  
 した。

「あツ、駄目だ、お母様……」



「早く逃げませう」  
 「お母様は無事ですか」  
 「大丈夫よ」  
 「有難う、僕が背負ひます」  
 庄作は夢中でした。  
 「お母様を背負ふと同時に、光子の手を握つて火の子がバラ／＼降つて来るなかを逃げ出しました。  
 と、行方からバラ／＼と走つて来た人が、光子の姿を見ると、  
 「お、光子か、無事だったか」と、抱きつきました。

庄作が家へ辿りついた時は、家の屋根から火を吹いてゐました。近所はバチ／＼と物凄い音と、紅連の炎が何者でも焼きつくさうとする恐しい勢で迫つて来ます。

「お母様……………」

と、庄作は叫んで家の内へ飛び込んだ時に、出會頭……………十三四の少女が死んだ様になつてグツタリしてゐるお母様を背負つて、曳づる様にして出て来ました。

「お母様……………」

と、飛びついた庄作の姿を見ると、少女は帛を裂く様な聲をしぼつて、

「庄ちゃん……………」

と、叫びました。

「お、光ちゃんか」



「あつ、本所の被服廠は四方火にかこまれて、なかへ逃げた人々は皆な焼け死ぬだらう……あゝ、可哀相に……」

と、逃げて行く人のこの話し聲を聞いた時、庄作は何と思ひましたか、

「光ちゃん、あなたはお母様と共にこの河のなかへ入つて待つて、下さいよ」

「あれ、危ない、どこへ行くのです」

「あつ、お父様、お母様も御無事で……」

「サア、火がつく……早く逃げ様……」

と、光子のお父様とお母様は、水を濡した毛布のなかへ、光子を入れて連れて行かうとしました。

「お父様、待つて下さい、庄ちゃんも一緒……」

「何ツ、他人など何うでもいゝよ、こんな人々をかまつてゐられるか」

「いえ、いけません、この毛布を貸して上げて、一緒に逃げませう」と、云つて聞き入れませんでした。

お父様は怒つてしまつて、光子も置き去りにしてお母様と共に本所の被服廠へ逃げて行きました。

光子と庄作はお母様を背負つて、漸くのとて兩國の橋のたもとまで逃げて來ました。



と、とめる光子の聲を聞き流して、庄作は被服廠の方へ走つて行きました。光子は猛火のなかに姿の消えた庄作の後姿を、涙の眼で見送りしました。

勇敢な庄作は人鬼のやうな血も涙もない光子の両親を、被服廠のなかから救ひ出して來ました。光子とお母様は兩國の橋の下の水にもぐつてゐて助かりました。

そしてそれから三日経つた後、お寺で祖母様とお母様と庄作と、光子とその両親とが互に顔見合せ嬉し涙に抱き合ひました。

光子のお父さんは庄作に助けられて、すでになくする命を拾つたのでありました。

お父さんは庄作やお母さんの前に両手を突いて、今までの事を涙を流して詫びました。そして銀行に頂けてあつたお金や地所もすつかり返すと云ひましたが、庄作もお母さんもそれを辭退しました。

光子と庄作は兩家の親睦になる事を喜び、同じ一つのバラツクの家のなかで、楽しい日を送る事になりました。

庄作のお母さんは祖母さんがつき添つて、病院へ入院する事になりました。光子のお父さんやお母さんは、生れ代つた様にいゝ人になり、庄作と光子は偉い人になるのだと云つて、毎日一生懸命に勉強をしてゐます。

庄作は中學を終へて後、大學に這入り、そして米國へ洋行するつもりなのであります。

光子は今に女學校を卒業したら、きつと庄作のお嫁さんになるのだら

うなどと、皆なにからかはれても、ニコ／＼笑つてゐるばかりでした。  
斯うした平和な月日が、二人の身の上や、また兩家の家庭に満ちて、  
今は二人の子供が小學校へと通學してゐます。(をばり)

大正十二年十一月一日印刷  
大正十二年十一月八日發行

〔定價金拾錢〕  
〔郵稅貳錢〕

### 震災悲劇

火の地獄  
哀れ血の池  
燒ヶ野ガ原  
十一時五十八分  
バラツクの家  
火焰を浴びて

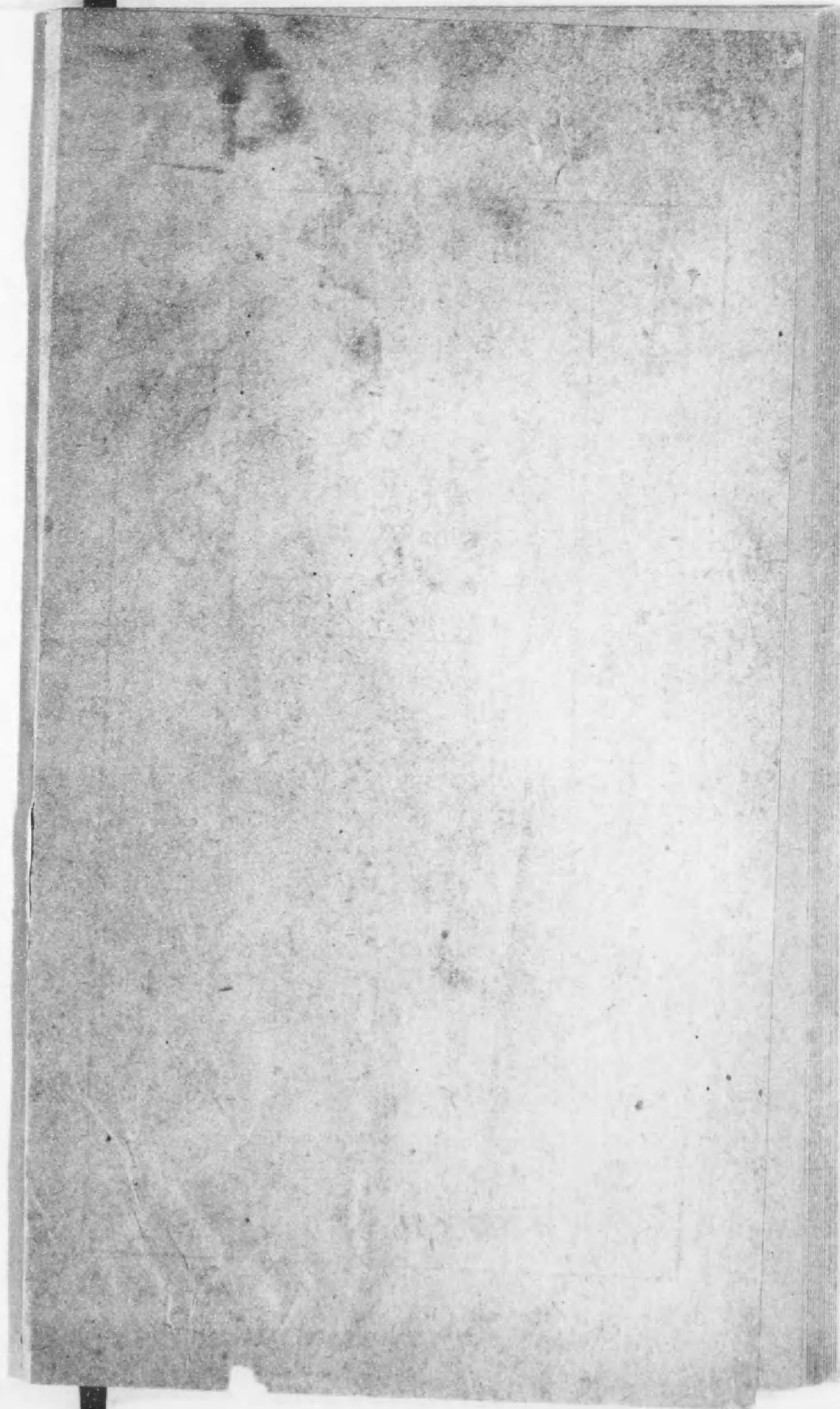
### 不許複製製

著者	花村露子
印刷者	東京府下三河島町九百三十三番地 天野重助
發行者	東京市淺草區瓦町二十四番地 中村惣次郎

### 發行所

東京市淺草區瓦町二十四番地  
電話淺草四九三一番  
振替東京一一六一六番

中村日吉堂



終